

せんげんやま
浅間山

粕壁字浜川戸にある浜川戸稻荷神社の右隣りの小高い山を浅間山という。昔、春日部氏がこの地を領していたころの居城の物見（見張所）として使用されたと伝えられている山である。

その後、富士浅間講の信仰の地となり、信者の手によって富士山に形どって一合目・二合目等の標識が建てられ、今もその名残りの標識が発見されている。

せんげんき
「仙元記」

（皆川家所蔵文書）によると、弘化二年（一八四五年）六月、この山が風雨により崩れたので、山の形を整えるため粕壁宿はもとより、幸手領・岩槻領・新方領等の近郷から多勢の人たちが集まり「ザル」と弁当を持参で崩れた山に砂を運び盛り上げた」と記されている。この場所は古く利根川と隅田川の濫流時代に出来た砂丘（利根砂丘という）地帯であるため、砂を運んで盛り上げたものである。このときの砂土運搬に使用された「ザル」が今も春日部八幡神社内に保存されているという。

浅間山の登り口にみそぎきょうはまるいわこう禊教派丸岩講が奉納建立した石の鳥居がある。また、そのかたわらに「ふじせんげんしゃ」と刻まれた二ト近イの石柱が砂の中に半分位埋まったまま横たわっている（関東大震災のときに倒れてそのままになったのか？）。

浅間山の信仰の起源は元亀・天正の頃（約四百年位前）にぎのみこと皇孫環々杵命きさきこのはなさくやひめの妃木花咲耶姫みことの命を御本体とした駿河国不二山麓なんぎようそんしの白糸の人穴で、南行尊師ぎようが行をした時、命の霊が現われて「世は將に兵乱の時なり、汝国家を泰平ならしめよ」と告げられた伝説がある。徳川家康は其の地に來て、過去の夢物語りに聞かされた地に神社を建て、木花咲耶姫を祭神として祀り、幼児の初山に登ることは全ての「けがれ」を払うことであるとされたこれが仙元神社の始まりであると伝えられている。

当地の浅間山も毎年七月一日には初山と称して、新生児の健康祈願に登山参拝する習慣がいまも行なわれている。山頂には「不ふ式じ大神おおかみ」と刻まれた二ト近イ位の碑が建てられている。

この浅間社の起源は不明であるが、江戸時代の天保十四年（二八四四年）に書かれた日光道中しゆくそんたいがい宿村大概帳には、最勝院が別当として管理している。また、明治十八年の粕壁宿地誌編輯ちしへんしゅうにはまつぞのやすみつ祠官松園泰光・かすかべこうじゆん祠掌春日部孝純（せきねはちろう名主関根八郎）と記されている。

現在、緑地保存区域に指定されている。

初出「広報かすかべ 昭和五十二年六月」かすかべの歴史余話